

高村昌憲個人誌

パープル

第50号



高村昌憲・個人誌 « *Takamura Masanori · Kojin-shi* »

詩

独裁に抵抗する人へ 高村昌憲

翻訳詩

アラン『ガブリエル詩集』（十七） 高村昌憲訳

『海辺の会談』への献辞

抒情詩

悲しみを見つめて

ソネット

評論

初期プロポ断想（三十三） 高村昌憲

- 1 私たちは未開人の様に議論する
- 2 司法調査と歴史
- 3 速度
- 4 哀れなもの（小魚）

「パール」総目次一覧

編集後記

表紙の写真はネモフィラの花々（茨城県国営ひたち海浜公園「みはらしの丘」にて）

平和の時代でありながらも
手っ取り早い結論を目指す
行動力を勘違いしながらも
不安を餌にした儘太るボス

民衆に不安という餌を撒き
ついて来いと独り息巻いて
猿のボスの様に暴力が好き
独裁は眠る心のなれの果て

情熱の感情で精神を働かせよ
個人の尊厳を守る矜持を持って
情操の感情で思想を確立せよ
独裁者に抵抗する思想を待て

あなたは戦場へ行っても書く
四十六歳で志願兵になっても
全ての独裁に抵抗すると書く
精神に必要なのは対話する友

戦いの時に独裁を許しても
平和の時代に独裁を許すな！
平和の時代の独裁は何時も
民衆を戦争へ送る醜悪の穴！

『海辺の会談』への献辞

波の端やその優しそうに眩くような音と
同じような黄色の砂と逆流する波
絶壁の穴には烈しい衝撃の波
燃えるように輝いている夕空の閃光
眠っている海のうねりは薄紫色
金色の輪で縁取られた鉛色の雲
泡でできた細いリボンと黒い横顔のような岬
蒼白い霧と青い別の岬を発見しながら
波の上で踊るのは何時もの漁師
そして小島の彼方にマストが描くのは
波で曲がってゆったりとした飾り文字の署名
ロープは唸り 櫂は湿ったような音がする
大空のゴルフ場に現れたのは星であり
そして蜜蜂の色をした絹のような長い糸
翼のように瞬くあなたの睫毛に混じり
大変に年老いて見えたり若く見える新しい化粧の
この世の変ることのない黄昏も何時も忠実だった
私が野生のままの愛を刺繍している間に
巻かれた時間を追いながら走って行ったのは
あなたの大切な思いを自ら鏡で見るためだった

(ガブリエルへ 一九三一年二月二〇日)

抒情詩

「大空は泣き 薔薇の木は涙を撒き散らす
しかし 私は妄想を恐れて武器を捜す
私はあなたのことを考え 私の魂は大変に優しい両眼の中
幸福が私に勇気を与えて呉れることを私は願う」
かくして力はむき出しになって警報の音は震え
激しく揺れる私の心を両手で握り締めていた

濡れた花冠を通して視線は何処を見ているの？
旅行者は何処へ行くの？ 注意深いその眼で
眠っているイメージは何処で目覚めるの？
「暗礁の辛い端よりももっと遠く
錆びたような岩場や海藻よりももっと遠く
それは物思いに耽った夢想の浜辺に役立っている

短剣のように輝いて多くを反射させた上に
光る波頭の影になった穴に遡りながら
重々しい船が波の動きを高くしていた
遠くには希望のように航跡が逃げていく
水平線を見るあなたの視線は夢見る波を作るが
その下ではあなたの心は夜のように黒い

震える船体の上であなたの思考は何という足跡！
瀕死の人の苦痛に半分眠っているこの人は
あなたの夢の中で長い揺れに圧力を加えているようだ！
巨大な力や冷酷な広がり動きを
少なくとも海は穏やかについて行くことはなく
四季の足跡がゆっくりとあなたを誘惑している

おゝミルクのような柔らかな花 震える花冠
暖かな春の香気 愛撫 狂ったような抱擁
あなたは私の愛しい両眼 大空の二つの水滴は
震えている 深い湖には蜜蜂色の葦
あなたの睫毛は柔らかく透明になって眠そうだ
鳥の群のように掠めていく妖精アリエルの口づけよ！

年輪を重ねる柏に巻きつくキツタのように

あなたの腕は私の野性的な上半身と優しい関係
しっかりと付着し 小鳥の鳴き声がよく響く
しっかりとした幹の下で 震える水の囁きを聞き
岸辺のロープのようにあなたの腕は私を結び
押さえ切れない欲望で血管が震えていた

時間は私たちの中で眠り 愛は今でも
影や香気の上で夢見ていたが その時は
今朝の曙が鮮紅色の光で突然あなたを掠め
同じ曙であなたの微笑を止めさせに来た時だ
私はあなたの伸ばした腕を見て 金色の夕べが
もう一つ別の太陽のように水平線に沈んだと信じていた」

かくして麻を織るようにその男は歌っていた
そして時間の流れに沿って賢明な波の前に
言葉が響き渡る箴(おさ)を投げていた
男の周りは賢明で従順で優れた泣き虫たち
男は最早蒼白いヴェールの夕空の下で
星々に触れた水でできた山を見ただけだった

(ボストンのガブリエルへ 一九三一年五月一二日)

悲しみを見つめて

ご覧 あなたの広い大河と緑の木々の上を
永遠に続く夕べのように もっと蒼白い
世界中の色彩が広がって萎れていくのを見てご覧
大空は灰色の月を宙吊りにして置き
祖国から追われた愛する人のように優しくて遠い
暗い山並の稜線は幸せの影のように
曲線を描き 何時も変わらずに存在している
そして神が戻り 最後の別れを告げて
遮断した水平線の下の方へ落下した！
これらは全てが一つでしかなく 陰鬱で
動くことがなく 遠い存在でしかない
水は今も昔も流れていたし これからも流れる
広大な存在と原初への帰還
日々の繰り返しが眠りの循環を生み
私の王妃は最初の姿の儘で変わらず
眼に見えない鎖で自分を女囚人と思う
私は彼女のじっと見据えた視線を見る 大変素早いその動きは
凝結したかの如くで 私は彼女の額の黒い皺を見る
おゝ夕べよ 王妃があなたに語るのは落下する希望
そして鳩の喉が歌う歌を人々は知っている
「おゝ私の心よ あなたが私に約束したことは
敵の時間と空間に勝つことに関して
私は希望を鍛え上げ大変美しく見ていたの？
おゝ永遠の時間よ 私が愛したイマージュの
蒼白い月のあなたのように 何時も立ち去り
決して変わらないあなたを私は祝福しなければならないの？」

(ガブリエルのために 一九三一年六月一日)

ソネット

おゝ私の真珠 あなたは丸い月の下で眠り
柔らかな螺鈿の光と忘れられた殻は
ベッドのエーテルの中にあなた自身を閉じ込めて
あなたの繊細な金髪のエキスが漂っている

とどろく大洋の上の月と同じように
幸いにもはるか遠くあなたの腕の優美な皺を隠し
あなたの項の光沢のある象牙の下に眠って
秘密が一つ 波紋のように震えている

幸いにもあなたは自分の魅力の中に眠っている
あなたに大変に近く 恋人となってあなたの上に急いで
両手で作った杯の中には乳房の二つの果実

おゝあなたの目覚めの時を窺うには私はあなたになるしかなく
藁のように金色に光るあなたの髪を通して
あなたは曙の上に太陽の光の網を作る人になる！

(ガブリエルへ 一九三一年七月四日)

花梨（カリン）



自らの葉を抱く花梨の実

1 私たちは未開人の様に議論する

議論する時は思わず激しい口調になることが良くあります。議論する相手を、まるでボクシングの相手の様に倒れることを願います。つまり相手が反撃して来なくなれば、自らが勝者であるかの如く見做します。これは議論の内容においても、自らの主張が正しかったからでしょうか。果たしてその勝敗は真実のものなのでしょうか。例えばアランは、モロッコ問題について議論するフランス議会のことを、一九〇八年六月二九日のプロポで次のように語っています。

「悲しいことに私たちは、平和について議論することさえ知らないのです。そして、討議しても既に戦闘です。この品のない言葉というものは、相手が同意したことを言うために出来る限りの大きな音を両手で立てることにあるのではないのでしょうか。理性ある人間の言葉は、曲芸師がやる爪先での回転や俳優の顰めっ面のように自然に受け入れられます。それは未開人の習慣でもあります。プラトンが強調して言ったように、もしも部屋が反響するなら、壁の石も自然に同意していることになります」。

議論することとは平和を願っているから行うのでしょうか、〈討議〉は既に〈戦闘〉のために行われているとアランは見ます。相手が戦闘に同意していることを言うために、自らは〈大きな音〉を両手で立てて議論に勝とうとします。そうではなくて、理性によって議論に勝つことが重要です。爪先で回転して後を向いたり、自分の負けを認めて顰めっ面をさせることで自然に受け入れられることが重要です。それは時代の主権者とは関係のないものであり、理性ある人間としての行為でもあります。〈未開人のように議論する〉ことが重要であるとアランは見ます。

あるいは現代世界に目を移してみると、二〇一六年六月二三日に、EUからの離脱を問う英国の国民投票が英国全土で実施されましたが、離脱支持が五一・九%、残留支持が四八・一%でした。しかしこの時、果たして英国国民は理性によって議論したのでしょうか。大学などでディベートが行われたことはテレビでも放映されて事実としてありましたが、この時残留支持派が勝利したとしても、その後の国民投票に生かされませんでした。〈爪先で回転して後を向いたり、自分の負けを認めて顰めっ面を〉したのは離脱支持派だったにも拘わらず、国民投票では逆に過半数を獲得したのです。まさに政治の世界は理性ある人間のものではなかった様です。従って国民投票とは理性ある人間のものではないと言えるのかも知れませんが、それでもそれが民主主義でもあります。つまり民主主義とは決して正しい判断を保証する制度のものではないのです。それは少なからず歴史が証明している処でもあります。従って正しい判断をするためには、時には新聞もテレビも無い未開人の様に思考してみることが必要です。

移民の増加による英国社会の不均衡の増長と国民生活の不公平感が、EU離脱を支持する過半数の国民の感情へ収斂して行ったのではないかと思えてなりません。つまり国民投票とは、正しい判断の選択とは異質の、時には人間の感情に基づく選択に違いない様に思います。もしもこの

見方が誤りでなかったなら、冷静に思考する時間を少し長く設けるべきであり、それこそ衆議院と参議院の二院制があるように、英国は再度国民投票を行うべきであると考えます。何故なら正しい判断とは、常に最初は少数意見である場合が多いからです。その少数意見は、時間と共に人々が冷静に理性ある人間として思考し議論することで、正しい判断を選択する多数意見に達することは枚挙に遑がない位に幾らでもあるからです。

現代では歴史の誤りとして全面的に否定されているあのヒトラーでさえも、ドイツ社会において最初は民主的に国民の多数決によって選択されたのです。ヒトラーの場合はユダヤ人という仮想の敵を捏造しましたが、今回の英国のEU離脱も〈移民〉という仮想の敵を捏造していないか、慎重に再検討する必要があると考えます。何故なら〈排除〉の思想は必ず戦争への道に至るからであり、その反対に平和の礎になるのは〈交流〉の思想であるからです。これは歴史が証明していることです。赤組と白組に分かれれば、赤組の人々は白組の人々を排除し、何時かは必ず戦うようになるからです。同じテーブルに就いて、同じ物を食べて、同じ話題を話すことでも平和は築かれます。同じ場所へ行き、同じ勉強をして、同じ物を作っても平和は築かれるでしょう。

〈交流〉は平和の礎であり土台です。平和を志向することとは、赤組と白組に分かれないで済む行為を行うことです。従って戦争を志向する者たちは必ず敵を捏造し、味方との差別化を図りますが、国内の発展と外交の進展についての有効な方策を満足に語れません。民衆の拍手喝采ばかりを求める様な政治家に騙されてはなりません。アランは拍手喝采を拒絶します。

「私は何時も或る種の罵詈雑言のように拍手喝采は拒絶して来ました。何故ならそれは単に人の気に入られようとする事、それに成功して満足することを思い描いていると話す者を、真に侮辱することにもなるからです。私が胃に一撃を食らった時と同様に、古くからの修辞学の法則に従って私は何時もボクサーが話すように笑いながら「パンチに耐えること」に専念して来ました」とアランは、理性的に思考しない熱狂的な拍手喝采を否定します。〈人の気に入られようとする事〉は、人を感動させたり納得させる行為とは無縁です。何故なら感動や納得には必ず沈黙が伴うからです。そして正しい意見と判断は、先ずは少数意見から始まるからです。全てが多数決によって事案を決定して行く民主主義の社会及び政治体制であっても、そこに少数意見を尊重しなければならない所以があるのです。何故なら今は少数意見でも、やがて人々が理解し納得し賛同して、正しい多数意見になる可能性は大いにあるからです。（完）

2 司法調査と歴史

歴史的に見て、正しい結果は必ずしも正しいやり方によって齎されるものではない様です。裁判所には調査権がありますから司法調査により、常に正しい結果を求めなければなりません。ところが正しいやり方で行っても、必ずしも正しい結果にならない場合がある様です。従って冤罪の場合は、正しい結果を求めて、別の方法を行うことも必要です。一九〇八年六月三十日のプロポでアランは、高級将校が間違った証言により城主の息子を監獄へ入れた話を書いています。農家が燃えている所へ駆けつける人々の中で、簡素な身なりのその若者が言った言葉を高級将校は悪く解釈して監獄へ入れたのです。証人たちも間違っただけで聞いていたのです。万事休すです。その若者は、その国の法律に従って監獄へ這入りました。

「その時彼（若者）は無駄であっても、正義の力に頼って別の方法を使いました。監獄の格子を通り抜けて、父親（城主）へ伝言を送りました。直ぐに城主がやって来て、自分で見て息子だと分かりました。その時、新しい事実の光が証言となって事件を明るみにしました。幾つもの記録が人々の眼によって読まれます。本当らしいことが議論の時に持ち出されるようになります、何故なら歴史に書かれるのもその様なものであるからです」。

歴史とは、時間という篩を通過するために、本当のことが議論の時に持ち出される様になるものです。高級将校の行為は、歴史の中からは消えるべきものでした。何故なら捏造であったからです。ところが間違いであっても、歴史として残り続けることもあるのではないのでしょうか。もっと正確に言うなら、現代における歴史として残り続けている捏造もあるのではないのでしょうか。それこそ何々歴史学会の重鎮の学者が言っているのであるから確かだろう、とその学説が歴史として残っている場合があるのかも知れません。

美術界では重鎮の画家が亡くなると、その画家が描いた絵画の価格が低下する事例もある様です。画家が亡くなればその画家の絵画が創作されることは最早無くなるのですから、需要と供給の経済的法則から言えば当然に存命中の方が価格が低い筈です。亡くなれば高くなるのが自然でしょうが、逆の現象が起きることがある様です。つまり作品の評価が作品そのものに無く、存命中の画家の地位や肩書つまり権威にあったための現象の様です。亡くなれば地位や肩書は無に帰して権威は無くなるのですから、死後の価格はより一層作品そのものの価格に見做せる訳です。

音楽の世界では、「音楽の父」と言われる J・S・バッハの生前は余り有名ではありませんでした。十八世紀前半では、今では「音楽の母」と言われているヘンデルの方が遙かに有名でしたし大家でした。バッハは、ヘンデルに会いたいと思って訪ねに行ったり招待したりしましたが、結局は会う機会に恵まれませんでした。ヘンデルの方が、当時は殆ど無名であったバッハに関心が無かった様です。バッハが現在の様に有名になったのは、死後七九年経った一八二九年に、メンデルスゾーンがベルリンで「マタイ受難曲」を演奏してからのことだったと言われています。それまでは世界中の殆どの方が、バッハの音楽を聴く機会がありませんでした。生前のバッハは

、例えばライブツィヒの小さな教会である聖トーマス教会などのためにカンタータを作曲し上演しましたが、決して楽な生活ではなく、初期の頃は殆ど毎週のようにカンタータを作曲しました。毎日曜日の礼拝のために数年間で作曲したのは二五〇曲に及びますが、まさに驚異的です（そのうち約五〇曲は紛失しています）。

生前の評価が必ずしも正当でない事例は、まだまだ沢山あると思いますが、それらは歴史になることによって正当な評価を受けるようになります。しかし、監獄にいる無実の人の場合は、歴史に身を委ねても殆どが無駄に終わるのではないのでしょうか。アランは次のように書いています。

「もしも友だちがいない人間が監獄に一度這入れば、長い間そこにいる危険があります。過去の歴史的事実は覆ります。最早、誰もそれを当てに出来ません。無実の人には手段しかありません。もしも無実であり得るのでしたら、偏見には偏見を、そして不正に対しては不正で行動させるのです」と書いてこのプロポは終わっています。

歴史家たちは、客観的事実に基づいているのが歴史である、と言います。しかし、そんなものが本当にあるのでしょうか。書かれているものが必ずしも事実でない場合もありますから、歴史が覆ることは幾らでもあるに違いありません。歴史とは、現代の人々が最も本当らしいと推察した虚構の物語に過ぎないと言っても過言ではないのかも知れません。新しい物語の発見により、次から次に歴史は書き換えられて行くからです。

しかし、司法調査は書き換えられるものであってはなりません。そんなことは決して許されてはならないことです。何故なら事実の一つであるからです。司法調査の目的は只管一つの事実を明らかにすることにあります。従って、〈偏見には偏見を、そして不正に対しては不正で行動させる〉こともあり得るとアランは言っています。如何なる手段であっても、一つだけの真実が明らかになることが第一義ですから、仮に結論までの証明が無くても構わないことになります。従って、不正に取得した証拠物件は証拠として採用されないのが司法の常識ですが、冤罪の場合は〈不正に対しては不正で〉行動することが可能であっても良い筈です。例えば真犯人しか知らないことを、不正に盗聴しても良い筈です。あるいは〈偏見には偏見で〉行動することが可能であっても良い筈です。例えば、今ではすっかり忘れられた二〇一六年七月に行われた東京都知事選挙で、鳥越俊太郎氏は女性問題を週刊誌に書かれたために裁判所へ提訴しましたが、手段が違うように思われます。その様な時間がかかる正当な手段では、有権者には真実が分からない儘、投票日がやって来て落選して仕舞いました。鳥越氏は、事実無根であれば、その週刊誌が過去に掲載した間違った記事を調査して、どれ程いい加減な週刊誌であるのかを速やかに公表すれば良かったのではないかと思われます。まさに〈偏見には偏見〉で対抗すべきでした。（完）

3 速度

東海道五十三次を通過して江戸から京都まで行っていた時代では、とても考えられない位に現代の交通機関の発達には目を見張るものがあります。確かに、二週間もかかって行った所へ、現代では三時間もかからず行けるのですから、非常に便利であり、とても意義のあることのように思います。

しかし、三時間かかる所へ二時間四十五分で行けるようになって、非常に意義のあることでしょうか。十五分早く到着することが、乗客たちの利益になり、ひいては社会の利益になるのでしょうか。一九〇八年七月二日のプロポで、アランはパリとセーヌ川の河口にある町であるル・アブルを結ぶ鉄道が十五分早くなったことについての感想を、次の様に述べています。

「(新型の蒸気機関車を)何故作ったのでしょうか。多分、パリとル・アブル間の旅行時間を十五分短くするためです。大変に高いお金を払って購入したこの十五分で、幸福な旅行者たちは何をするのでしょうか。多くの人は時間が来るまで駅のホームで過ごします。他の人は、もう少しコーヒーを飲んで十五分を過ごすでしょうし、出発のアナウンスがあるまで新聞を読むかもしれません。利益は何処にあるのでしょうか。利益は誰のためなのでしょう。」

奇妙なことは、もしその列車が速くなく、十五分前に出発するとか十五分遅く到着して少なくとも速い列車よりも十五分多くかかっていることになっても、旅行者は退屈して過ごすこととなります。誰でも、このプロポを苦勞して書くのに似て、あるいはトランプで遊んだり、ぼけっとしていたりして、一日に少なくとも十五分は無駄に過ごすことがあります。何故、その時間を客車の中でも使ってはいけないのでしょうか。

客車の中の座席は快適で、どんな安楽椅子よりも快適です。従って十五分早く到着すると、十五分間座席にいたことが出来なくなります。あるいは又、出発までの時間が十五分遅くなっても、その間にコーヒーを飲んだりぼけっとしている時間が増えるだけではないでしょうか、と言ってアランは蒸気機関車の速度が速くなったことの成果を余り高く評価していません。

現代のサラリーマンの場合でも、東京から大阪への出張は日帰りになるようで、一泊も出来ない会社が多くなってきたようです。新幹線の「のぞみ」で行けば十分に一日で往復出来るのですから、経費を削減する上では当然なのかも知れません。しかし、それでは大阪の町や美味しい食べ物を知る機会が少なくなりますから、東京と大阪の交流という観点から見ると余り成果は上がらなくなるだろうと思います。何処へ行くにも推して知るべしです。地方の過疎化問題の原因も、実はこの辺りにあるのかも知れません。つまり地方に用件があっても、交通機関の発達のお陰で用件だけを済ませて短時間で往復出来るのですから、地方に滞在する時間が短くなり、ひいては住民も減少し、人も物も金も減少して空洞化するばかりではないでしょうか。それでは逆に、便利に発達し続ける東京に住む人々は幸福なのでしょう。

「人生は特に良いものです。人生そのものによって良いものです。理屈は何もありません。旅行やお金持ちや成功や楽しみがあるから幸せなのではありません。幸せであるから幸せなのです。幸福は人生の味わいそのものです。苺には苺の味があるように、人生には幸福の味があります」とアランは一九〇九年五月二九日のプロポに書きましたが、ここにアランの幸福論の真髓があり

ます。勿論、それは無為であることではありません。何もしないことが幸福ではありません。もっと適切に言うなら、何をしても幸福でいられるのです。つまり行きたい所へ旅行へ行けるとか、お金を沢山持っているとか、成功して出世したとか、好きなことをして楽しむことが幸福ではないのです。行きたい所へ行けなくても、お金は余り無いけど、成功しないで出世もしなかったけれども、好きなことをして楽しむことも無いけれども、幸福でいることは可能なのです。苺が苺であるためには土と水と太陽さえあれば、止揚された崇高な思想が何も無くても、素晴らしい苺の味は生まれるのです。何故なら、そこには命そのものがあるからです。

新型の蒸気機関車は決して命そのものではありません。旅行もお金持ちも成功も楽しみも命そのものではないのです。従って少しでも命に触れて幸せであるためには、旅行の時には旅行の命に触れることです。アランの美しい言葉が前者のプロポにあります。

「大きな車窓には河や谷や丘や村や町が過ぎて行くのが見えます。小丘の斜面を線路が続き、その線路の上を列車が行き、河を進む舟のように見えます。その地方の豊かさの全てが広がっています。或る時は小麦やライ麦であり、或る時は甜菜畑や精製所です。その次には美しい樹林であり、その次は牧草と牛と馬です。何本もの溝が大地に横たわっているように見えます。そこにあるのは地理学にとっての最高のアルバムであり、あなたは難なく頁を捲って、毎日変わって行くものが見えます、四季によっても変わって行き、刻一刻と変わって行きます。丘々の向こうには雷雨がわき上がって行くのが見え、干し草を積んだ馬車は道を急いで行きます。又、別の日には人々が金粉の中で刈入れ作業をして働き、大気は太陽にふるえています。この様な光景と比肩するものは何でしょうか」。

質素で出世もしないで楽しみが何も無い生活にも、必ず幸福はあるのです。何故なら、命そのものには本来幸福の味があるからです。充足した味が必ず付随しているからです。それは誰にも、何処にいても、存在しているものです。そして、幸福とは真に味わうことが出来る人のものでもあるのです。（完）

4 哀れなもの（小魚）

夏の風景です。川は蛇行し、柳が何本かあります。釣り人が素早く釣り糸を上げます。魚がぴちぴちと太陽に光っています。陽気で穏やかな風景に見えますが、人間嫌いの人がその風景を邪魔して釣り人に「あなたの喜びは、何も見ない盲人になりたいのです。太陽にぴちぴち光っている銀貨のような魚にあなたは感動していますが、それは死にかけている不幸な生き物です」と一九〇八年七月十一日のプロポの最初でアランは言います。釣り上げた魚のことを言っているのです。

それに対して釣り人は「神経質な奴だ、とっとと消えてくれ。もしあなたが言っていることを真に受けたら、生きては行けない。骨付きあばら肉を切っている間、私は柔らかい羊のことを泣かなければならないのだろうか。もし私が哀れな馬が既に力の限界に来ていて、馬小屋から出て来る時には空腹で半分死んだようになっていたと考えるなら、どうして辻馬車に乗ることが出来るだろうか。詩人のこの同情を何処で止めれば良いのだろうか。私たちが動けば、小さな昆虫を殺すことになる。親切が過ぎれば、結局は意地悪になる。もし全てに期待すれば、心が擦り切れて仕舞うと私は言いたい。同胞を愛することだ。そうでない者の苦痛は決して考えないのが正しいことだ」と答えます。

日本人が食べる時の挨拶に「いただきます」「ごちそうさま」がありますが、これらは他者の命を頂戴して食べることを感謝する意味があるとのこと。人間嫌いの人は、この日本人の挨拶に込められた思想を極端なまでに拡大解釈した時の言葉だろうと思います。仏教思想のように命あるものを殺生してはならない思想を徹底したならば、恐らく自らの生命の維持も困難になるかも知れません。勿論、生命を尊重することは大切なことです。ところが、全ての生命を等しく尊重するなら〈心が擦り切れて仕舞う〉と釣り人は言います。全ての生命ではなく、同胞に限定して、〈そうでない者の苦痛は決して考えないのが正しいことだ〉と言います。

そして又、全ての生命は抽象された生命のように等しく尊重されるものではない、と沢山の襷がある肩掛けを肩から掛け直して、優美な若い女性が言います。

「私たちの喜びは極めて少なく、沢山の苦しみを前提としています。この肩掛けも哀れな女性の手で刺繍されたものです。刺繍をするには眼を大変酷使します。工場や仕事場や屋根裏部屋での暗い光景が私には見えます。しかし、あなたが話していることは何であろうと全て根拠が無くて、大変に抽象的です。草の上に飛び出た小魚にとっては大変に全てが寒々しています。脚を強く踏まれて痛そうに鳴く犬は、あなたの話よりも私の心を何時も動かしました。自分の心に鎧を着なければなりません、馬のような動物に涙を流さないようにとあなたは良く言います。しかしあなたは、私が見たことも会ったこともない見知らぬ男や女の労働者について私が泣くことを望んでいるのです。私の眼が黒いうちは、私は痛みが酷くなるように苦痛を生んでいくような酷い哲学者ではありません。あなたの本質には、私の心を開いたり閉じたりする美德が決してありません。あなたが言うように、時として眼を閉じなければ、人は生きて行けません。まあ、如何に私が眼を開けて無駄であっても、私は肩掛けや刺繍を見ます。でも、その仕事ぶりや針は決して見えません。私には職工や刺繍機械が決して見えません。私が自分で示している苦痛を無視した後で、何故あなたは私が隠している苦痛を見付けに行きたいのですか」。

生命が抽象されれば、愛も感情も抽象されてそれらの実体は排除されますし、内実のない言葉

だけで人は理解しようとしません。「合理的な愛の中には理解すべきものは何もありません。愛と理性は混合されると腐敗します」と『思想と年齢』（第三部七章）の中でアランは言っていますが、〈全ての生命を等しく尊重する〉こととは、生命を抽象することであり、生命の実体を忘却することです。本当の公平な気持ちを持っているなら、毎日生活している家族の生命と、地球の裏側の人々の生命とは異質にならざるを得ませんし、それが生命を抽象しない人間としての本当に公平な気持ちでもあります。

「生活することとは、人間ではなく、馬車に繋がれた馬の通る道が立派になるようにすることです。全ては、哀れを癒やす私たちに代わって組織化されます。あなたは説教をしても危険を負うものは何もありません。あなたの博愛は、太陽に当たる魚のようにぴちぴちして虚しいものですわ」とこの女性が言う言葉でプロポは終わります。この思想は人間嫌いの人には分からないものです。何故なら人間嫌いの人には他者を頼り、信じ、協力する意志が稀薄であるからです。つまり彼には、社会という組織化された思想によって行使される精神が弱体化しているために、生命を公平に理解出来なくなっているからです。〈太陽に当たる魚のようにぴちぴちして虚しいもの〉になっているからです。

しかしながら、組織化され社会化された思想にも愛と感情は必須です。つまり愛と感情を理性で理解しないことです。生命を抽象化しないことです。障害者施設を襲って十九人を殺した犯罪、I S（イスラム国）のテロ、日本赤軍のテロ、そしてナチスのホロコーストや米国の原爆投下など、全ての殺人や虐殺は生命を抽象化した精神が齎した行為の結果であったと言っても過言ではないと思います。感情の文学である〈詩〉が、文学や芸術の範疇に止まりながらもその役割は益々大きくならなければなりません。愛と感情によって組織化され社会化される所以もここにある筈です。（完）

高村昌憲・個人誌「パール」総目次一覧

創刊号（1996年6月27日）

詩＜笠谷陽一特集＞Ⅰ「白い雲」「君の祖国 僕の古里」「切ない想い」「満月の夜」「最初の外国語」「郷里」「東大門（トンデムン）」「日韓の朝ぼらけ」（笠谷陽一）／Ⅱ「消える独歩詩碑」「あれから五年」「シルバーシート」「夢人生」「丸刈り」「誌を再び」「ぬいの家」に居候」「埴輪の恋」「詩友を求めて」（笠谷陽一）

エッセイ「笠谷陽一さんの歌」（高村昌憲）

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）

第二号（1997年1月16日）

詩Ⅰ＜追悼・笠谷陽一＞「飛翔したカチガラス」「天然記念物」「着色される半島」「秋の空」「あれから一年」（高村昌憲）／Ⅱ「ニレジハーヅ讃」「お祭りの風」「癖」「足跡」「アデュー・お茶の水」「ひとりでいることは」「思い出」（高村昌憲）

翻訳＜アランのプロポ＞「詩人」「詩の技法」（高村昌憲訳）

編集後記、表紙デザイン（宿谷志郎）

第三号（1997年3月16日）

詩Ⅰ「傷あとに夕陽が」「北海道・穂別」（堀口精一郎）／Ⅱ「希望」「ビリ」「尊敬」「娘へ」「沈黙の顔」「ハムスター」「手と手」「お化け屋敷」（高村昌憲）

翻訳＜アランのプロポ＞「砂漠の詩」「芸術家と職人」（高村昌憲訳）／読者からの言葉

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）

第四号（1997年5月16日）

詩Ⅰ＜特別寄稿＞「覚悟」（森 常治）、「初めての海をわたる日に」（堀口精一郎）／Ⅱ「森を守る」「ある不満」「落とし物」「権利」「化粧をする町」「変容」「手と手」「お化け屋敷」（高村昌憲）

エッセイ「ハツとした嬉しさ—新人賞佳作を受賞して—」（高村昌憲）／翻訳＜アランのプロポ＞「歌の叫び」「詩と音楽と舞踏」（高村昌憲訳）／読者からの言葉、寄贈誌

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、絵（高村喜美子）

第五号（1997年7月16日）

詩Ⅰ＜特別寄稿＞「青山椒」（堀口精一郎）／Ⅱ「コスモスの頃」「柘榴」「花梨のある静物」「バンクシア」「樹木」「桜」「一つの顔」「女流画家」（高村昌憲）

エッセイ＜特別寄稿＞「笠谷さんのこと」（齋藤 志）／翻訳＜アランのプロポ＞「叙事詩」「歌と叫び」（高村昌憲訳）／読者からの言葉、寄贈誌

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、絵（高村喜美子）

第六号（1997年10月16日）

詩Ⅰ＜ソウル行＞「金浦国際空港」「漢江」「利川陶芸村」「龍門寺」「鶺鴒」「濁り酒」「南大門市場」「唐辛子味噌」「民話風に（Ⅰ）」「民話風に（Ⅱ）」（高村昌憲）／Ⅱ「花の絨毯」（堀口精一郎）

エッセイ「遺稿のなかから頂いた大事な言葉—崔華國氏と金善慶さん—」（堀口精一郎）／翻訳＜アランのプロポ＞「樵」「砂糖抜きコーヒー」「思考は詩の娘」（高村昌憲訳）／読者からの言葉、寄贈詩誌・詩集等

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、絵（高村喜美子）

第七号（1998年1月16日）

詩<笠谷陽一>「光化門」「冬の朝 一吾が青春」「私の運命」「アゝよかった」（笠谷陽一）
エッセイ「満月の夜」再読（高村昌憲）、「思い出」（今岡祐一）、「紫野牡丹」（北川理
音子）、「戦中派文学少年のなれの果て 一笠谷陽一さんとの接点を求めて」（堀口精一郎）、「
日系二世の悩み」（齋藤 志）、「笠谷さんの二篇の詩から」（岩本 勇）、「無垢な少年」（森田
進）／スピーチ「出版記念会のスピーチ」（笠谷陽一・高村昌憲記）／笠谷陽一年譜
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、絵とカット（高村喜美子）

第八号（1998年4月16日）

詩「白い恋」「自己紹介」（高村昌憲）
評論「藤井康夫の世界」（高村昌憲）／翻訳<アランのプロポ>「ライオン一世」「国祭日
」「ディエップ棧橋」「売る技術」（高村昌憲訳）／<第一回パープル賞>のお知らせ／読者か
らの言葉、寄贈詩誌・詩集等
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、絵とカット（高村喜美子）

第九号（1998年7月16日）

詩「正視」「深刻な飛躍」「税と蛍」「自適」「蛍の血」「蛍を噛む」「蛍の舞踊」（高村
昌憲）、「菜の花忌」（堀口精一郎）
エッセイ「地獄でホトケーオレゴンへの旅 序幕一」（堀口精一郎）／翻訳<アランのプロポ
>「旅行者達」「家庭で」「心遣い」（高村昌憲訳）／<犬蔵の蛍を残したい！>、<第一回パ
ープル賞>のお知らせ
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、絵とカット（高村喜美子）

第十号（1998年10月16日）

<第一回パープル賞発表>赤の部門・入選「春のチンドン屋」富永たか子、佳作「夏音（なつね
）の時」よしざわまこと・「願い」布川 鴉／青の部門（該当作品なし）、<選評>大島博光・
堀口精一郎／詩「蝶の伝言」（高村昌憲）、「夏帽子」（堀口精一郎）
エッセイ「アメリカ医療は愛嬌とみつけたりーオレゴンへの旅 2一」（堀口精一郎）／翻訳<
アランのプロポ>「ドン・ファン」「水門」「食堂の匂い」「蓄音機」「雨の中」（高村昌憲訳
）
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、絵とカット（高村喜美子）

第十一号（1999年1月16日）

<特集・海上（かいしよ）の森からの伝言>四行詩「招待」「等高線」（高村昌憲）／エッセ
イ「共生について」（高村昌憲）、「海上の森と私」（土橋文明）、「森との出会いから」（河
鱈好美）／詩「森のあるうちに」（曾我部行子）／詩「二本の四つ葉」（よしざわまこと）、「
銀座の青空を翔ぶ」（堀口精一郎）
エッセイ「朝鮮をうたった二つの詩」（堀口精一郎）／翻訳<アランのプロポ>「死者信仰」「
賛辞」「キプリング」「友情」（高村昌憲訳）
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第十二号（1999年4月16日）

四行詩「学級崩壊」「詩への誘い」「パン屋と花屋」（高村昌憲）／詩「冬の日ぐれの歌一八十八
歳之歌」（大島博光）、「月火水木金土日」（よしざわまこと）、「青空」（泉たつ子）、「

オレゴンの娘」(堀口精一郎)

エッセイ「詩に「うた」とルビを振ることの是非に関する覚え書」(川杉敏夫)、「焼酎と山の詩一鳥見迅彦のこと」(堀口精一郎)／翻訳<アランのプロポ>「祈り」「知性」「王は退屈する」「ノイローゼ」「政治家の学校」(高村昌憲訳)／<第二回パープル賞>のお知らせ、受贈詩誌等御礼、住所録

編集後記、表紙デザイン(宿谷志郎)、カット絵(高村喜美子)

第十三号(1999年7月16日)

四行詩「蛍の一生」(高村昌憲)／詩「消えたストライキ」(高村昌憲)、「電子LOVE一愛乱舞字一」(よしざわまこと)、「朝のしあわせ」(堀口精一郎)

エッセイ「妻と訃報欄と追悼文のこと」(堀口精一郎)、「現代詩としての四行詩」(高村昌憲)

翻訳<アランのプロポ>「占い」「剣の舞」「帆船の力」(高村昌憲訳)／<第二回パープル賞>のお知らせ、住所録

編集後記、表紙デザイン(宿谷志郎)、カット絵(高村喜美子)

第十四号(1999年10月16日)

<第二回パープル賞発表>赤の部門・入選「夏」杉山龍雄(辞退)、「遍路の道」(山川久三)／青の部門・入選「くまさん」(野田飛鳥)、佳作「春」(白川貴衣)、<選評>大島博光・堀口精一郎／詩「カラスの視線一我的創世神話一」(よしざわまこと)、「たそがれにも花を」(堀口精一郎)

エッセイ「短歌が好きだった頃一或る戦後青春の軌跡一」(堀口精一郎)／翻訳<アランのプロポ>「存在するものを愛すること」「神さまの話」「ダーウィンに従って」「七面鳥学校」「テンペスト」「キヅタの葉」「楡の木」(高村昌憲訳)／詩誌等深謝

編集後記、住所録、表紙デザイン(宿谷志郎)、絵とカット(高村喜美子)

第十五号(2000年1月16日)

四行詩「廃園」「土地トラスト」(高村昌憲)／詩「夜光虫の影」(高村昌憲)

エッセイ「高村家の家訓」(高村昌憲)／翻訳<アランのプロポ>「郵便配達人」「退屈」「光の祭典」「ストライキ」「野羊」(高村昌憲訳)／<第三回パープル賞>のお知らせ、詩誌等深謝

編集後記、表紙デザイン(宿谷志郎)、カット絵(高村喜美子)

第十六号(2000年7月16日)

四行詩「祭りの構図」(高村昌憲)、「君が好き」(よしざわまこと)

評論「何故現代詩は危機なのか」(高村昌憲)／翻訳<アランのプロポ>「私は雨が好き」「エヴァリスト・ガロア」「星々の規範」「同情」「モルモットたち」(高村昌憲訳)／<第三回パープル賞>のお知らせ

編集後記、表紙デザイン(宿谷志郎)、カット絵(高村喜美子)

第十七号(2001年1月16日)

<第三回パープル賞発表>赤の部門・入選「昼の下」頼圭二郎、佳作「否(ノン)」(小川敏雄)／青の部門・該当作品なし、<選評>大島博光・堀口精一郎／四行詩「諏訪湖のトンビ」(齊籐 志)、「ヒトゲノム」(和田文雄)、「旅人よ」(富永たか子)、「足どり」(山川久三)、「無題」(野田あすか)、「お母さん」(白川貴衣)、「ネコ科のうた」(川杉敏夫)、「偽者たち」(高村昌憲)

評論「初期プロポ断想（その一）」（高村昌憲）／翻訳＜アランのプロポ＞「上機嫌」「望遠鏡の話」「酩酊者たち」「道徳、それは富裕者たちのためにあるもの」「歴史の一頁」（高村昌憲訳）／＜第四回パープル賞＞のお知らせ、住所録
編集後記、表紙デザイン（宿谷志郎）、絵とカット（高村喜美子）

第十八号（2001年7月16日）

詩「一粒の罪」（よしざわまこと）／四行詩「否（ノン）に詩人」（堀口精一郎）、「渴き」（高村昌憲）

エッセイ「私と四行詩」（齋藤 志）／評論「初期プロポ断想（その二）」（高村昌憲）／翻訳＜アランのプロポ＞「牧月」「君主制教育」「カリクレス」「内部統制」「他人の不幸」「その男」（高村昌憲訳）／＜第四回パープル賞＞のお知らせ、住所録
編集後記、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第十九号（2002年1月16日）

＜第四回パープル賞発表＞赤の部門・入選「詩」いしいさちこ、「歴階（きざはし）」（開安紀子）／青の部門・該当作品なし、＜選評＞齋藤 志／四行詩「再生」（高村昌憲）、「カバン」（頼圭二郎）、「あらびやのうた」（和田文雄）、「箱船」（齋藤 志）、「花茗荷」（堀口精一郎）

評論「初期プロポ断想（その三）」（高村昌憲）／翻訳＜アランのプロポ＞「互いに愛し合いなさい」「笑い」「馬と犬」「万用歴」「幸福になる方法」（高村昌憲訳）／＜第五回パープル賞・募集要領＞

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、絵とカット（高村喜美子）

第二〇号（2002年7月16日）

四行詩＜病床二題＞「天井の犬」「血中酸素」（齋藤 志）、「白い器」（高村昌憲）

評論「初期プロポ断想（その四）」（高村昌憲）／翻訳＜アランのプロポ＞「私は大変小さな町を思い出します」「不朽の肖像」「動物の群れ」「エピクテトス」「忍耐」「精神の病気」「恋人ザディーグ」（高村昌憲訳）／＜第五回パープル賞・募集要領＞、住所録

編集後記、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第二一号（2003年1月16日）

＜第五回パープル賞発表＞赤の部門・入選「目薬」姥島とし子／青の部門・該当作品なし、＜選評＞齋藤 志／四行二連詩「不確実な実り」（開安紀子）、「六月の思い出」（高村昌憲）、「嘘の色」（いしいさちこ）

評論「初期プロポ断想（その五）」（高村昌憲）／翻訳＜アランのプロポ＞「隣人の情熱」「無気力な人たち」「憂鬱」「グランデ老人」「人とを喜ばせること」「本質」（高村昌憲訳）／＜第六回パープル賞・募集要領＞

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第二二号（2003年7月16日）

四行二連詩「家族旅行」「ばら苑」（高村昌憲）

評論「初期プロポ断想（その六）」（高村昌憲）／翻訳＜アランのプロポ＞「勝利者たち」「礼儀作法」「歴史家の精神」「ナイフは何故切れるの？」「情熱」「遠くを見よ」（高村昌憲訳）／＜第六回パープル賞・募集要領＞

編集後記、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第二三号（2004年1月16日）

＜第六回パープル賞発表＞赤の部門・入選「グラス」なべくらますみ／青の部門・該当作品なし、＜選評＞齋藤 志／四行二連詩「風狂」（齋藤 志）、「ひと夜」（高村昌憲）、「カメムシ」（佐藤光幸）、雨（鮮 一孝）

評論「初期プロポ断想（その七）」（高村昌憲）／翻訳＜アランのプロポ＞「天文学」「ユゴーとスタンダール」「或る療法」「我が儘な人たち」「絶望」「労働」「とんまな人」「泣き言」（高村昌憲訳）

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第二四号（2004年7月16日）

四行詩「生涯酒」（齋藤 志）、「星雲」（高村昌憲）、「四行連詩」（木島 始）

評論「初期プロポ断想（その八）」（高村昌憲）／翻訳＜アランのプロポ＞「乗船客たち」「装飾類」「ダーウィンの魔法」「鼻」（高村昌憲訳）

編集後記、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第二五号（2005年1月16日）

四行詩「遠野行」（なべくらますみ）、「少年の雲」（佐藤光幸）、「第一号公園」（高村昌憲）、「暁闇」（開安紀子）／詩「今日は立冬」（堀口精一郎）

評論「初期プロポ断想（その九）」（高村昌憲）

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第二六号（2005年7月16日）

四行詩「山へ」「第九条」（高村昌憲）

論考「絵空事と現実―「九条の会」アピールへの異議」（中平 耀）／評論「初期プロポ断想（その十）」（高村昌憲）

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第二七号（2006年1月16日）

四行詩「七〇年代の雨」（高村昌憲）、「雨の日の朝」（岸田たつ子）、「無邪気」（山口格郎）、「エーゲ海にて」（開 安紀子）、「破る」（齋藤 志）

評論「初期プロポ断想（その十一）」（高村昌憲）

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第二八号（2006年7月16日）

四行詩「高校生」「ポピーの花」（高村昌憲）／詩「のうぜんかずら」（中平 耀）

評論「初期プロポ断想（その十二）」（高村昌憲）

編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第二九号（2007年1月16日）

四行詩「古刹」（開 あきこ）、「少子化哀歌」（高村昌憲）／散文詩「人間は言葉によってのみ人間であるか（二）（三）」（よしかわつねこ）

特集＜追悼 川杉敏夫＞「さようなら川杉さん ご冥福を」（遠山信男）、「諷刺と数学の詩人・川杉敏夫」（木津川昭夫）、「川杉敏夫氏追悼」（北岡善寿）、「現代の娑婆羅・川杉敏夫」（中平 耀）、「川杉さんの詩お未来」（高村昌憲）、「ダンディな刺客、「断念の美学」（谷口ちかえ）、「多彩な才能の終焉」（堀口精一郎）／住所録

編集後記、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第三〇号（2007年7月16日）

四行詩「南仏へ」（高村昌憲）／散文詩「人間は言葉によってのみ人間であるか（四）（五）」（よしかわつねこ）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集』（高村昌憲訳）
評論「初期プロポ断想（その十三）」（高村昌憲）
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第三一号（2008年1月16日）

四行詩「秋の小丘」（開 あきこ）、「日の出に」（高村昌憲）／散文詩「家郷」（中平 耀）、「人間は言葉によってのみ人間であるか（六）（七）」（よしかわつねこ）
書評「詩は味わうもの—齋藤志詩全集—」（高村昌憲）／エッセイ「追悼の想いあれこれ—死とはただ居なくなること秋ざくら 博」（堀口精一郎）／評論「初期プロポ断想（その十四）」（高村昌憲）
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第三二号（2008年6月21日）

詩「櫻花幻想」「櫻花変容」「戯れ詩・春日漫想」（中平 耀）、「高遠の空」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集』（二）（高村昌憲訳）
評論「初期プロポ断想（その十五）」（高村昌憲）／住所録
編集後記、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第三三号（2008年12月21日）

詩「蝸たち」（高村昌憲）、「ちいさきものの力」（開 あきこ）
評論「詩人と家郷—一つの詩論・日本人の原像について—（上）」（中平 耀）／「初期プロポ断想（その十六）」（高村昌憲）／住所録
編集後記、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第三四号（2009年6月21日）

詩「新緑」「四月の誓い」（高村昌憲）
評論「初期プロポ断想（その十七）」（高村昌憲）、「詩人と家郷—一つの詩論・日本人の原像について—（下）」（中平 耀）／住所録
編集後記、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第三五号（2009年12月21日）

詩「再生」「革命家のように」（高村昌憲）、「静寂の音」（中平 耀）、「時間よとまれ」（みうらたつお）
評論「初期プロポ断想（その十八）」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集』（三）（高村昌憲訳）
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第三六号（2010年6月21日）

詩「献杯」（高村昌憲）、「父を悼み」「あれはまだ...」（高村喜美子）、「ひとつの聲—逝きし時代への挽歌—」（中平 耀）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集』（四）（高村昌憲訳）
評論「初期プロポ断想（その十九）」（高村昌憲）
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第三七号（2010年12月21日）

詩「錦帯橋」「尾道水道」（高村昌憲）、「その命はひとつ」（うらべあきこ）、「廃校」「廃船」「廃車」「廃墟」（なべくらますみ）、「源流の一滴—冬の日—の幻想」（中平耀）
評論「初期プロボ断想（その二〇）」（高村昌憲）
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第三八号（2011年6月21日）

詩「鎮魂の詩—東日本大震災の死者たちに捧げる—」「静寂の音（2）」（中平耀）、「黒電話」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集』（五）（高村昌憲訳）
評論「初期プロボ断想（その二一）」（高村昌憲）
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第三九号（2012年2月21日）

詩「揺れる枯葉」（高村昌憲）、「静寂の音（3） 夢幻」「自然の中で」（中平耀）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集』（六）（高村昌憲訳）
評論「初期プロボ断想（二二）」（高村昌憲）
編集後記、住所録、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第四〇号（2012年8月21日電子書籍登録）

詩「庄内の桜」「四月の空」（高村昌憲）、「沈黙の天使」（中平耀）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集』（七）（高村昌憲訳）
評論「初期プロボ断想（二三）」（高村昌憲）
編集後記、表紙デザイン（宿谷志郎）、カット絵（高村喜美子）

第四一号（2012年11月21日電子書籍登録）

詩「しちしちにち」「美しい生活」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集（八）』：「征服者」「思い出」「景色」「グリザイユ（灰色の風景）」（高村昌憲訳）
評論「初期プロボ断想（二四）」：「物神崇拜」「池の蛙」「離婚」「真の歴史」（高村昌憲）
編集後記、カット絵（高村喜美子）

第四二号（2013年5月21日電子書籍登録）

詩「春風」「原木の桜」「皇帝ダリアの誘惑」「風の音」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集（九）』：「月」「灰色の朝」「トレベロン」「十二月の朝」（高村昌憲訳）
評論「初期プロボ断想（二五）」：「王の力と富」「軍隊と神と市民」「結婚」「ソクラテスの勇気」（高村昌憲）／編集後記

第四三号（2013年11月21日電子書籍登録）

詩「シューベルトの風」「サラダ会」「自由な肉体」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集（十）』：「朝にて」「ソネット」「冬」「感謝」「あなた」「ガブリエルの『魅惑』について」（高村昌憲訳）
評論「初期プロボ断想（二六）」：「友人たちの正義」「作家たちの自由」「速い生活」「十三日の金曜日」（高村昌憲）／編集後記

第四四号（2014年5月21日電子書籍登録）

詩「時間を聴く」（高村昌憲）、「ホトトギス」「シジュウカラ」「ハクセキレイ」「泣く」（中平耀）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集（十一）』：「少し悲しい夢」「異教徒の詩」「釣

り人」「冬の到来」「五行詩」「三月の三行詩」（高村昌憲訳）

評論「初期プロボ断想（二七）」：「もしもフランスが病気なら」「交霊術」「本能と情念」「金科玉条」（高村昌憲）／編集後記

第四五号（2014年11月21日電子書籍登録）

詩「時間を聴く」（高村昌憲）、「森（2）—ある日の夢・ポール・デルポー「森の小径」に觸發されて—」（中平耀）、「変えてはならない」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集（十二）』：「五行詩」「二月の三行詩」「思い出」「三月のソネット」（高村昌憲訳）

評論「初期プロボ断想（二八）」：「回転テーブル」「暦」「役所」「男女同権」（高村昌憲）／編集後記

第四六号（2015年5月21日電子書籍登録）

詩「否定の精神」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集（十三）』：「思い出」「夢」「春」「あなたの朝のために」（高村昌憲訳）

評論「初期プロボ断想（二九）」：「偶然と運命」「恋愛から友情へ」「公開講座」「立方体」（高村昌憲）／編集後記

第四七号（2015年11月1日電子書籍登録）

詩「労働の精神」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集（十四）』：「四季」「失われた春」「月への夢想」「ポートランドの海に」（高村昌憲訳）

評論「初期プロボ断想（三十）」：「七十四人の歴史家」「満ち潮と引き潮」「住民」「猫と鼠」（高村昌憲）／編集後記

第四八号（2016年5月1日電子書籍登録）

詩「お花見の心」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集（十五）』：「雷雨」「記念日」「香水」「ヴィーナスへ」（高村昌憲訳）

評論「初期プロボ断想（三一）」：「ブルドア判事」「ソルボンヌ大学生」「不況」「自由意志」（高村昌憲）／編集後記

第四九号（2016年11月1日電子書籍登録）

詩「堀を越える人へ」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集（十六）』：「メーヌ地方の森から」「秋の頃」「一年」「繊細な抒情詩」（高村昌憲訳）

評論「初期プロボ断想（三二）」：「四月には薄着をするな」「宗教的体験」「偉大な副王は腹を出して」「ドレフュス事件とそれらの主張」（高村昌憲）／編集後記

第五〇号（2017年5月1日電子書籍登録）

詩「独裁に抵抗する人へ」（高村昌憲）／翻訳詩 アラン『ガブリエル詩集（十七）』：「『海辺の会談』への献辞」「抒情詩」「悲しみを見つめて」「ソネット」（高村昌憲訳）

評論「初期プロボ断想（三三）」：「私たちは未開人の様に議論する」「司法調査と歴史」「速度」「哀れなもの（小魚）」（高村昌憲）／総目次一覧／編集後記

（以上）

◆十一月二日（水）に風間草祐著『ジジ&ババの気がつけば五〇カ国制覇 一働くシニアの愉快的旅 日記一』（牧歌舎・2015・九二六円＋税）を読了した。企業の中で常勤で働く者にとって、海外旅行はなかなか決断出来ない行為である。その上、夫婦揃っての行為となると余程の覚悟と時間とお金が必要になる。覚悟やお金があっても、現実的に最も困難なものは時間であろう。筆者は定年間近であっても、常勤のサラリーマンである。夫婦で海外へ行くには、少なくとも数日から一週間程度の休暇が必要になる。先ず、どの様な方法で休暇を取ったのかが気に掛かった。勿論、夏休みや正月休みに夫婦揃って成田から出発するケースが多いが、やはり海外出張が多い企業であり職種であった。社内規程がわからないから正確なことは言えないが、若い頃、会社に「念書」を入れて、出張帰りに妻と落ち合いアメリカを旅するという暴挙を犯した前科者だから、恐らく、規程というストライクゾーンいっぱいを狙った、それまでの常識を覆す振る舞いであったに相違ない。まさに〈危険〉を犯しての〈制覇〉であり〈出版〉であった。従って、こういう冒険は殆どの者が敢行しないと思われる。しかし筆者の偉大さは規程を超えた信念にあり、規程を言い訳にして決断しない怠慢家でないことにあり、美德を生む決断家であることにある。延いては我が国の社会への問題提起があり、力強い思想がある。〈不決断が悪の中でも最悪のものである〉とデカルトは言った。自由の無い社会は、良い社会ではない筈だ。国境を壁で遮断すれば自由が無くなり、良い社会でなくなるだろう。規程を口実に社員の海外旅行を実質的に不可能にすれば自由が無くなり、良い会社でなくなるだろう。自由である処に強制はなくなる。その反対に不自由な処に強制は必ず生まれる。筆者の冒険は、まさに日本社会の強制への抵抗と自由への挑戦に繋がっている。そして、民間レベルでの国と国との交流が、戦争を防御するためのものになるのは明白である。人々の交流を断絶して赤組と白組に分かれれば、やがて両者の間で戦いが始まるであろう。あるいは自由な表現が出来なくなると、情報は隠蔽されたり捏造されたりして不正がやり易くなり、表現よりも利害が優先する社会になって戦争へ至るのも歴史が証明していて自明であろう。些細な規律によって自主性を埋没させる日常を超越した処に、本書の高邁な精神が宿っているのである。この精神の光が照らしているのは、ヨーロッパが十四カ国、アフリカ・中近東が十一カ国、アジア・オセアニアが十四カ国、南北アメリカが十一カ国である。殆ど世界中の地域が網羅されており、生の儘の貴重な情報に溢れている。又、本書にはタイプの違う添乗員やコンダクターのサービス振りも色々と紹介されているので、海外旅行関係の職業に携わる人々にとっても良い参考書になるに違いない。

◆十二月四日（日）に東京・吉祥寺の「永谷ハウス」で開催された「風狂の会」（主宰・北岡善寿氏）の川柳忘年会に参加した。題詠「ドン」と自由詠を三句ずつ計六句を予め投句し、当日の参加者による投票での選考が行われ、全七〇句から各々一席、二席及び佳作を決定した。当日の選考結果については、電子書籍の同人誌「風狂（二〇一六年十二月号）」

<<http://p.booklog.jp/book/111633/read>>において、原詩夏至氏が「覚書」として、詳細に報告されているのでここでは割愛するが、参考までに私の作品だけを全てご紹介する。

1 小説のドンも物真似「記憶ない」（題詠）

- 2 政治塾ドンの場合は宴会場（題詠）
- 3 コウモリとドンの習性闇が友（題詠）
- 4 フィリピンにイギリスに又アメリカも（自由詠）
- 5 勝つまでの演技だったと言ってくれ（自由詠・佳作）
- 6 服薬を勧めておいて不安顔（自由詠）

（1句、石原慎太郎元東京知事。2句、小池東京知事と都議会議員。3句、白日が苦手。4句、ポピュリズム蔓延。5句、トランプ氏。6句、副作用が心配。）

俳句は自然を表現する詩であり、川柳は時事を表現する詩であると言われている。ところが、五七五の中に時事を表現するとなると色々と説明が欲しくなり、やはり字数制限がきつくなる。そして誰もが先ず思い当たる観点から創ると、所謂「同想」になって仕舞う。つまり誰もが同じ様に感じたり考えたりしたことを同じ様な言葉で創った川柳では陳腐になり、出来の良い句にならないのである。従って、独自の観点から「穿つ」ことが必要になる。単純な発想を避けて他人が見落としていて気付かないでいる詩境から創るのが、良い句を創る秘訣の様である。

◆川柳は我が国の詩として新しい形式である、と言っても二五〇年の歴史がある。ところが、ほぼ現在の様な形式の現代詩は、川路柳虹が口語体自由詩の「塵溜」を発表したのが一九〇七年（明治四〇年）であるから、その歴史は百十年に過ぎないのである。勿論、我が国の詩の歴史としては、短歌があり俳句があるから非常に長い。つまり〈和〉としての詩の歴史は長く、西洋の詩形式を踏襲した現代詩という〈洋〉としての詩の歴史は短いのである。我が国の文化の中には、この様な和洋が共存している構造が他にも沢山ある。例えば音楽には和としての雅楽などの邦楽があり、洋としての西洋音楽がある。絵画にも和としての日本画があり、洋としての油彩画がある。舞踊にも日本舞踊があり、クラシック・バレエがある。建築にも和としての日本家屋があり、洋としての洋館やビルがある。庭園にも日本庭園と洋風庭園がある。服装にも和服と洋服があり、料理にも和風と洋風があつて枚挙に遑ない。我が国の文化や生活においては和と洋が、現代の生活様式の中で殆どあらゆる領域で共存しており、世界的に見ても稀有な国である。その様にして見ると、川柳は和としての批判精神の表現形式として存続しているが、洋としての批判精神の表現形式が明確に見当たらないのである。それは現代詩であると敢えて言いたいのであるが、どうもすんなりと肯んぜ得ない状況である。何故なら歴史が短いのに加えて、文化や社会に定着し確立していない様に感じるのは私独りではないと思うからである。ところで、小説や評論などの散文においては、詩とは逆に和が衰退して、洋のみが存続しているが、洋の批判精神そのものの表現の確立が我が国では歴史的にも不十分の様である。何故なら自由な自己表現の様式としての社会制度と内在的には個人の自発的自律的精神が、稀薄な儘で確立されていないからである。その点で我が国の社会及び文化の成熟並びに個人の高邁な精神を志向する時、川柳が果たす役割は意外に大きいかも知れないと思う。

◆三月三〇日（木）にアラン著『思想と年齢（下）』高村昌憲訳を、パブーの電子書籍に登録した<<http://p.booklog.jp/book/113861/read>>。これをもって上・中・下巻の全三巻として完訳したことになる。ご存知の様に、フランスの哲学者アラン（一八六八～一九五一）は、その膨大な作品の中では『幸福論』が最も著名である。しかし『思想と年齢』も、『芸術論集』などと並んでアランの代表作品の一つと言える。何故なら生涯に亘って思想の体系化を企図しなかったアランの思

想を知るには、その作品を読むことが全てであり、彼の哲学の最も微妙な核心を表している作品の様に思えるからである。つまり本書を読むに当たり、数式的に記号化して読んでも甚だ心許ないのである。例えば、「訳者あとがき」の中でも書いたが、「AはBであり、AはBでない」という原文に遭遇することが良くある。これを単に数式的に読むと矛盾が生じて来て、とても理解不可能なテキストになって来て仕舞う。ソクラテスとプラトンの有名な会話の矛盾に似ている。ソクラテスは「プラトンは嘘つきである」と言う。プラトンは「ソクラテスが言うのは本当である」と言う。それではソクラテスから嘘つきと言われたプラトンが「ソクラテスが言うのは本当である」と言ってもそれは嘘になり、ソクラテスが言うのは本当でなくなって仕舞う。一体、ソクラテスが言うのは本当なのか、嘘なのか、分からなくなって来て仕舞うだろう。矛盾が生じるのである。頭の中だけで思考しても理解出来ないことは幾多とある。しかし、幸福には矛盾が無いのである。幸福であることに嘘はつけない筈である。『思想と年齢』は、『幸福論』に劣らず、いやそれ以上に幸福を思考する術を教えてくれるに違いない。因みに、「AはBであり、AはBでない」の原文は、「人間は動物であり、又人間は動物でない」と翻訳すれば理解出来るだろうと思う。数式的に翻訳するとアランの微妙な思想を理解することは難しいが、翻訳する際には原文に無い「又」を入れることによって理解し易くなるに違いない。このような翻訳は直訳では不可能に近い。所謂〈不実な美女〉にするのが理想であるが、ヨコのものをタテにする翻訳作業が困難な所以でもある。つまり翻訳とは一種の創作作業であると言っても過言ではない。従って、原文に無い単語も必要と思えば加えるべきであり、句読点も自由に使用することをお勧めしたい。

◆四月二日（日）に東京・調布の神代植物公園で行われた「風狂の会」恒例のお花見に参加した。東京の開花宣言は昨年と同様に三月二日（火）であったが、満開には未だやや早く、今年の開花の進行は遅れている様子であった。それでも前日の雨天からは想像もつかない程の晴天で、各自が持ち寄った飲み物や肴で十分にお花見を満喫することが出来た。風狂の会は自主的な集まりであり、その創設の趣旨や主宰者の北岡善寿氏の希望もあり、一切の強制は排除されている。一人ひとりが順番に自己紹介をしたり意見を発表したりする強制された〈儀式〉も割愛されている。このためお互いに知らない者同士でも、気楽に参加出来てお花見や会話を楽しめるのが良い点である。勿論、知らない者同士が個人的に自己紹介するのは自由であるから時には名刺交換も行われるが、そういう風景が極めて少ないのが風狂の会である。その代わりに年下の人でも高齢者へ自由に意見が言えるし、又自由にアルコールにも酔える様で、足許がふらついて二次会にも行けずに植物園から直接帰宅した若手詩人がいる処も風狂の会の良い点である。従って、参加者の全員をここにご紹介出来ないが、顔見知りの詩人の名前だけでも記載することにしたい。出雲筑三、北岡善寿、神宮清志、高島りみこ、高村昌憲、田中眞由美、富永たか子、長尾雅樹、なべくらますみ、原詩夏至、安川登紀子（敬称略）。この外に数名の詩人が参加された。

◆多くの詩人や著者から紙媒体による新刊の詩集、単行本及び詩誌等を頂戴した。失礼と思いながらも殆どお礼状も差し上げていない。最近ご恵贈賜ったものの表題、著者名（発行者名、編集者名又は執筆者名）及び出版社名などを掲載して、この場を借りて深謝する。なお、詩誌等の刊行物は最新号のみを表記した。（順不同・敬称略）

詩集『記憶の中のピアニシモ』吉田定一（竹林館）

詩集『千年の樹』高野保治（竜骨の会）
詩集『能泉寺ヶ原』田口三船（榛名まほろば出版）
詩集『アメリカわづらい』葵生川玲（視点社）
詩集『和田文雄新撰詩集』和田文雄（コールサック社）
詩集『大塚欽一全詩集』大塚欽一（土曜美術社出版販売）
歌集『ワルキューレ』原詩夏至（コールサック社）
『辻井喬論』中村不二夫（土曜美術社出版販売）
『わたしのイスパニア語の旅』市川慎一（彩流社）
『幕末の言語革命』楠家重敏（晃洋書房）
「死霊」五号（黒羽英二）
「櫛」四号（なべくらますみ）
「伽羅」十四号（吉田定一）
「SUKANPO」二〇号（田口三船）
「風樹」二一号（大塚欽一）
「詩界」二六三号（日本詩人クラブ）
「ZOWV（ゾラヴ）」通巻四六号（原詩夏至）
「解纜」一六二号（西田義篤）
「竜骨」一〇三号（高橋次夫・友枝力）
「ぱびるす」一一八号（頼圭二郎・岩井昭）
「幻竜」二五号（館内尚子・清水正吾）
「現代詩研究」七七号（渡辺元蔵）
「流」四六号（福島純子・山本聖子・西村啓子）
「飛揚」六四号（葵生川玲）
「腹の虫」四号（くにさだきみ・原詩夏至）
「ERA（第三次）」八号（川中子義勝）
「花林花二〇一七」十一号（高澤晶子・原詩夏至）
「流域」七九号（市川慎一）
「人民の力」一〇六三号（人民の力編集委員会）
「祈りと再生のコスモロジー」（池田雅之・浜田泉）
「L'ARCHE」二六号（浜田泉）
「月報おたる11月号」六二九号（玉井耕平）

◆「パープル」は第五〇号をもって終刊にします。長い間ご愛読頂き有難うございました。

高村昌憲個人誌 パープル（第50号・終刊号）

2017年5月1日登録

<http://p.booklog.jp/book/114436>

著者：高村昌憲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114436>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト